

## 心的因果の説明としてトロープ説は事態説よりも優れているのか

金杉武司 (Takeshi Kanasugi)

國學院大學

秋葉氏は著書『真理から存在へ』において、述定的真理の真理根拠という役割はトロープによって最もよく果たされうると論じることによって、トロープの存在を擁護することを試みている。そのようなトロープ説の優位性を示すための一つの議論として、本書の第8章では、非還元的物理主義という枠内で考える限り心的因果の説明に実在的基盤を与えるという課題をよりよく達成できるのは事態説ではなくトロープ説だとする議論が展開されている。本提題では、秋葉氏のこの議論が妥当なものであるかどうかを検討したい。

秋葉氏は、まず事態説に関して次のように論じている。事態説では心的因果を説明する際にトークンレベルで過剰決定が生じる。これに対して、「普遍者 F が個体に付与する力能集合は、それを実現する普遍者 G が個体に付与する力能集合の真部分集合である」とする力能集合説を採れば、トークンレベルの過剰決定は回避できるが、心的普遍者と物的普遍者が二重に個体に力能を付与するというタイプレベルの過剰決定が生じる。これに対して、「普遍者は、それが個体に付与する力能のクラスターと同一である」とする力能クラスター説を採れば、タイプレベルの過剰決定を回避できるが、今度は、非還元的物理主義において物的普遍者の例化と心的普遍者の例化の間に成立すると想定されていた構成的依存関係の順序が逆さまにされてしまい、非還元的物理主義の基本主張の一つが維持できなくなる。他方トロープ説に関しては、秋葉氏は次のように論じている。トロープ説では、心的因果で原因としてはたらく心的タイプと物的タイプのトークンが数的に異なる存在者でないから、トークンレベルの過剰決定は生じない。またトロープ説では、タイプについてのわれわれの語りはトロープの類似性クラスをもとにして理解されるため、個体が特定のトロープをもちそれに結びついた特定の力能をもつことは、それに先立って存在するタイプの存在者によって決定されるようなことではなく、それゆえ、タイプレベルの過剰決定も生じない。このようにして、トロープ説の優位性が帰結する。

以上の議論に対して、本提題では、主に以下に挙げるような疑問を提示し、それらについて議論したい。

- 事態説において力能クラスター説を採ることが本当に、物的普遍者の例化と心的普遍者の例化の間の構成的依存関係の順序を逆さまにしてしまうのか？
- 秋葉氏が考えるトロープ説では、あるタイプに属するトロープ間の類似性はそれらのトロープに結びつけられる力能の類似性によって説明される。そして、力能の類似性を説明するには、トロープの類似性クラス間の法則的關係に言及する必要があるように思われる。これは悪性の循環ではないのか？

- 秋葉氏は、トロープが心的因果の説明の真理根拠であることを保証するための一つの選択肢として、トロープ説に関して力能クラスター説を採るという可能性に魅力を感じていると論じているが、その場合、(秋葉氏によれば) 事態説が直面するところの構成的依存関係に関する問題は生じないのか？
- トロープ説に関して力能クラスター説を採るということは、物的トロープと心的トロープが全体と部分の関係にあり同一でないと認めることになると思われるが、これは、トロープ説が持つ唯名論的な存在論的儉約性の特徴に反することにならないのか？